教職大学院 Newsletter No.33

福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4　2011.06.25

特色を生かした学校づくり

坂井市立丸岡南中学校校長　坪川淳一

丸岡南中学校は，平成18年4月に新設され，開校6年目を迎えた。「教科センター方式」，「スクエア制」を学校経営の両輪とし，学習指導・生活指導の両面から生徒の自主性・自律性を育むとともに，学校全体が自分(生徒)の居場所となるような「自分(生徒)のための学校」づくりを目指している。また，教師がお互いに学び合いながら，日々の仕事の中で能力をレベルアップできる場としたいと思っている。

丸岡南中学校の教育活動

(1) 教科センター方式

それぞれの「教科スクエア」では，その教科ならではの雰囲気を醸せる環境づくりが求められる。各教科教室やメディアセンター(MC)では，生徒が3年間の学習の見通しや，学習の振り返りをする場となるよう，工夫がされていなければならない。つまり，教師がアイデアを出し合い，休み時間・昼休みや放課後に行きたくなるような「教科スクエア」を生徒に提供することで，学校全体が学びの空間になる。

オープンスペースのMCは，また，教師と生徒のコミュニケーションの場である。「全職員が全生徒の育成にあたる」意識を持って，教師は生徒の学校にいる時間帯はMCで過ごし，生徒の要望に対応する。

またMCでは，教師が教材研究・ワークシートの作成などの授業準備や，MC経営などを協力しておこなう。さらに，日常的にお互いの授業を参観して，同僚を身近な手本としたり，TTなどでお互いの授業で協力し合ったりすることもできる。まさに，教師間で「協働」がおこなわれる。

(2) スクエア制

丸岡南中学校では，「学級」を大切にしながらも，縦割り異学年集団(スクエア)を単位として，生徒の学校生活は成り立っている。このスクエア制導入の目的は，以下のようなことがある。

- *日常的に他学年の生徒と交流させ「みんな丸岡南中学校の仲間」という大きな帰属意識を醸し出す。*
- *教師の学年・教科間の壁を取り除き「全職員が全生徒の育成にあたる」という協働の意識を持たせる。*

「各学年1学級ずつが集まった生活集団」が1つの「スクエア」となり，ホーム教室もスクエアごとに配置され，集会もスクエアごとに整列する。清掃場所もスクエアごとの分担で，ランチルームでの給食もスクエアごとにまとまる。その他「スクエアDAY」などのスクエア行事や様々な学校行事を含めて，教育活動の概ねをスクエア単位で取り組む。

スクエア活動では，同一スクエア担当教師の協力・支援を受けながら革新的な試みにチャレンジする機会に恵まれ，生徒も教師も成長し学校全体が活性化する。スクエア制の導入は，教科センター方式成功のために必要不可欠であると考える。

(3) 交流

平成20年度から福井大学教職大学院研究拠点校となり，継続して教師を院生として送り出している。現職で働きながらの勉学は困難も多いが，学校内に新鮮な空気や新しい理論が持ち込まれ学校組織全体が活性化される。また，大学の先生方が何度も来校くださるなど，他の教師への刺激も大きい。

おわりに

本校に勤務することになった教師は，否応なくそれまでの方法や考え方をリセットし，新たな教育観を身につけつつ経験したことのない取り組みと格闘する。結果的に，日々の取り組みが教師自身の認識を問い直す新たな研修の場となっている。そのような意味で，本校にはOJTの考え方が開校時から自然にある。

生き生きと自主的自律的に活動する生徒の姿勢が教師を変容させ，教師のレベルアップが学校の活性化につながっているといえる。

内容

特色を生かした学校づくり (1)
平成23年度第1回運営協議会が開催 (2)
5月の合同カンファレンスを終えて (4)
拠点校研究集会報告 (6)　拠点校だより (8)
Staff紹介 (11)　院生紹介 (12)
教師教育ネットワーク・交流のひろば (16)
フィンランド視察を終えて (17)
日本教師教育学会第21回大会案内(21)
福井大学６月ラウンドテーブル案内 (23)

平成23年度第1回運営協議会が開催

平成23年5月18日（水）に平成23年度第1回運営協議会が開催されました。梅澤章男・教育学研究科長の挨拶，松田通彦・福井県教育庁企画幹の挨拶に続いて，全体協議及びグループ別協議を持ちました。

福井県教育庁　松田　通彦　企画幹（学校教育）挨拶

先生方，お早うございます。今年度第1回目の福井大学教職大学院運営協議会開催に当たりまして，県教育委員会として一言御挨拶を申し上げます。

福井大学教職大学院は，今年度，開校4年目を迎えられますが，県の教育委員会からは，平成20年度の15人を皮切りに，21年度は24人，22年度は15人を，そして今年度は15人の教員が院生としてお世話になっております。このうち，これまでに修士課程を修了させていただいた39名につきましては，現在，各学校のまさにスクールリーダーとして，教職大学院での経験を基に自信を持って日々の教育活動に取り組んでおります。改めて，関係各位には心から感謝を申し上げますとともに，今後とも御指導のほどよろしくお願いを申し上げます。

ところで，県の教育委員会と教職大学院は，これまでさまざまな形で，連携協働をさせていただいております。たとえば，福井県教育研究所や嶺南教育事務所は，拠点校のひとつとして，教員の指導力向上に資するための組織的な研究を教職大学院の先生方の御指導を得ながら行なっております。また，教育研究所主催のミドルステップアップ研修では，教職大学院の先生方に御講義をいただいたり，院を修了した教員が講師を務めている研修講座もあります。

加えて今年度は，新任教頭研修のプログラムの一つである，「傾聴の技術と実践」において，新任教頭が大学の方に出向いて研修に取り組ませていただくなど，お互いのコラボレーションが益々広がり，深まっていることを実感いたしております。

折しも，今般の，西川知事の「福井新々元気宣言」の中にも，「福井大学と教育研究所連携の教員研修をパワーアップ」するという一項目が盛り込まれており，今後，県教育委員会としましても，大学にさらなる御理解と御協力をいただきながら，両者の連携をより一層強くしていきたいと思っております。

さて，中教審に諮問されておりました「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の審議経過が，平成23年1月31日に「教員の資質能力向上特別部会」から報告されました。その中では，「教員が教職生活全体を通じて，不断に資質能力を高めていくことを支援するシステム作りが必要」とされており，教員免許制度においても，教員資格の修士レベル化やより高い専門性を身に付けるための支援，さらには，それを証明するための新しい免許状についても検討する必要があると述べられております。また，教員に求められる資質能力として，「高度な専門性と社会性，実践的指導力，チームで対応する力」があげられているのも注目されるところであります。

こうした内容をみますと，今後，学校の課題を解決し，高い教師力の育成を目指す教職大学院の在り方といったものがますます重要になってくると思われます。福井大学教職大学院では，「学校現場が大学院の教室である」という考え方に立脚し，院生は自分の学校が抱える課題を同僚教師と協働しながら解決の方向性を見いだすことが特色となっており，まさに，中教審特別部会の報告内容を先取りした取組が，早くから実践されておられますことに改めて敬意を表する次第であります。

また，このような教員の実践コミュニティの育成を第一に掲げた教育カリキュラムによって，大学院生，教員個人の成長，さらには教員集団の育成が図られており，この手法は，教育現場における課題研究の活性化のみならず，福井県の学校教育全体の活性化にもつながっていくものと確信しております。

21世紀の知識基盤社会を生き抜く子供たちを育成するためには，教育の力，教師の力量がますます問われることになります。どうか福井大学教職大学院におかれましては，私ども県教育委員会との連携を一層密にしていただいて，本県の高い教育力をこれからも維持し，さらに新しい段階に引き上げて行くために，一層の御指導・御支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに，本日の運営協議会が実りあるものになりますことを心から御祈念申し上げ，御挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

全体協議及びグループ別協議

全体協議では，①福井大学教職大学院の運営(案)，②平成23年度年間行事計画(案)，③平成24年度学生募集スケジュール(案)について協議され，いずれも原案どおり承認されました。

その後のグループ別協議は，拠点校・連携校，県教育委員会，市町教育委員会の5グループに分かれ，それぞれの現状報告や要望等の情報交換・意見交換が行われ，検討課題も出されました。いくつかを紹介します。

・県知事のマニュフェストにも示されたとおり，教育研究所と教職大学院との連携を目指す動きを作っていくことを課題としたい。教職大学院からの関わりも求めていきたい。

・なぜ，連携が必要なのかをとらえ直すことが重要。今年から教頭を対象とした研修事業が始まる。大学という場と機会を借りて，管理職として自分たちが学びにいくという姿勢を持てるかが重要。

・今後の方向として高校教育の重点化も進められる。授業改善を柱とした組織的な展開が欠かせない。そのためにも教職大学院が重要度を高めていくと思われる。

・関係者にはその良さが十分理解されているが，教職大学院の良さを教員一般にどのように広めるかが課題。高等学校では，特に，院生が校内にどう広げられるかが鍵。そのためにも，校内の協働体制を深め，様々の拠点校や連携校において学校全体がよりよく改善されていく経験を増やし，実感の輪を広げていくことが重要。

・いじめや不登校問題，家庭との関わりなど，学力の土台を占めている部分に課題が見えている。学校を離れられない現状の中で現場の声に対応しながら研修の充実を図りたい。

・入学者への支援として，市町の中に経済的支援の動きが出てきた。一方で，個人のスキルアップととらえる市町もある。

・年によって院生が出る年と出ない年がある。もう少しアピールが必要。教育長が集まる連絡会での説明なども重要。また，拠点校は基本的に院生がつながるが，連携校はその院生が修了すると切れてしまう。何とかつなげられるといい。

・経済的側面での負担感の多さもあり，院生の継続が困難なところも多い。院生がいない拠点校もあるが，拠点校の見直しも論議されるべきだ。

・至民中学校や丸岡南中学校では，開校当時に在職した教員がほとんどいなくなりつつあり，教育活動の継続・発展に向けて教員の思いをどうつないでいくかが課題。院生や教職大学院に期待がかかる。

（津田　由起枝）

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
運営協議会要項

平成20年3月7日　研究科委員会決定
直近改正　平成21年3月6日

（趣旨）
第1　この要項は，福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会(以下「運営協議会」という。)について，必要な事項を定める。
（審議事項）
第2　運営協議会は，次の各号に掲げる事項を審議する。
(1)　教職開発専攻の運営に関する事項
(2)　教職開発専攻の事業計画に関する事項
(3)　その他必要な事項
（組織）
第3　運営協議会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
(1)　教育学研究科長
(2)　教育担当の副学部長
(3)　附属学校園担当の副学部長
(4)　教職開発専攻長
(5)　教職開発専攻の専任教員(客員教員を含む。)
(6)　福井県教育委員会関係者　　若干名
(7)　福井県教育研究所長
(8)　福井県教育庁嶺南教育事務所長
(9)　福井県特別支援教育センター所長
(10)　関係市町教育委員会教育長
(11)　拠点校・連携校の校園長
（委員長）
第4　運営協議会に委員長を置き，教育学研究科長をもって充てる。
2　委員長に事故のあるときは，あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。
（会議）
第5　委員長は，運営協議会を招集し，その議長となる。
2　運営協議会は，委員の3分の2以上の出席がなければ会議を開くことができない。
（委員以外の出席）
第6　委員長は，必要と認めるときは，運営協議会に委員以外の者の出席を求めることができる。
（庶務）
第7　協議会の庶務は，総務部教育地域科学部支援室において処理する。
附　則
この要項は，平成20年4月1日から施行する。
附　則
この要項は，平成21年3月6日から施行する。

5月の合同カンファレンスを終えて

スクールリーダー養成コース1年／東京都板橋区立赤塚第二中学校
岡部　誠

初夏を思わせるような陽気の中，5月の合同カンファレンスが実施された。私は，今月も志を同じくした仲間との議論への期待に胸が高鳴り，前回4月に感じたかすかな興奮を開始時刻の前から隠せずにいた。入室と同時ににわかに活気づいた教室で，熱気のために気温が上がったように感じたのは私だけであろうか。

さて私は，今年度より東京都板橋区を代表して福井大学教職大学院の門をたたいた。およそ月に1度の授業は，教育改革を担う現職の先生方，将来の教職を熱望する有望なストレートマスターの方々，そして我々院生を支えていただくスタッフの皆様との貴重な対話の時間と捉えている。それは同時に，東京での実践の提案を吟味していただける絶好の機会でもあり，有意な経験をなされているエキスパート集団からのアドバイスを受けたことを現場の実践としてフィードバックする効果も期待しているところである。

様々な思いをめぐらせ足を運んだ5月の合同カンファレンスは，4月に引き続き『語り合い』を主要なツールとし，『教育改革の展開を吟味することの意味』について議論を交わすこととなった。

まずオリエンテーションでは川上先生より，資料を読み解く際のポイントを実践に対応した論理的知識としてご教授いただいた。特に，その改革が求められるようになった背景の把握，中でも，教育改革のベクトルを探る高度な手法は，変遷の過程を捉える上で大変感興がわく講話となった。

今回提示された資料は中央教育審議会及び文部科学省から出されたもので，いずれも喫緊の教育課題として位置付けられているものばかりである。改めて国策としての教育の担う責任感や使命感のようなものを感じずにはいられなかった。私はその中から，「中央教育審議会／教員の資質能力向上特別部会」から出された審議経過報告を選んだ。今年1月末に提言されたものだというのに，恥ずかしながら私はこの時，初めてこの文章に触れた。今後10年間で教員全体の3分の1が入れ替わることを背景とした課題と現状との比較による検討，そこから派生する教員養成の在り方や教育委員会，大学等の関係機関の連携・協働…あれ？どこかで聞いたような！？ここでの提言は，まさに我々が，いま，ここで体験している合同カンファレンスでのコミュニティ形成が謳われていると感じるのに，そう時間はかからなかった。

この資料の中で私は「現職研修の在り方」を興味深く読み解いた。研修の定番といえば，授業者の自評⇒参観者の授業構成に関する意見と質疑⇒外部講師による講話，という従来型の研修を（東京では）いまだによく見かける（私もそうである）。ところが，教員の資質能力向上を図るため，研修の実施内容・方法について，「個別的・協働的な学習をより重視する方向」での見直しに言及している。つまるところ，学習指導においても児童生徒への一斉指導からの転換が図られているように，我々教員も資質向上を図るためには，従来型の養成システムを見直すことが急務である，ということだ。

さて，読み始めてから1時間後。クロスセッションの時間となった。なぜかいつも，この時ばかりは緊張と興奮が交錯する。恐らく，ほんのわずかな側面でしかない自分の考えの拙さと，そこを補完してくれる仲間の助言，忠言が，多面的・多角的な思考となっておぼろげながらも形となっていく過程に触れられるからではないだろうか。理論としての「協働」を実践として体感したところで，余韻を残したまま終了の時間となった。5月合同カンファレンスを終え，『語り合い』の意図する本質に少し近づけた気がしている。

次回6月は，M2の方々にとって節目となるラウンドテーブルが控えている。来年の自分と重ね合わせながら，私自身，より一層学校現場での実践に意欲的に取り組んでいく決意を新たにした。

スクールリーダー養成コース1年／福井市至民中学校
鈴木　三千弥

予備日程での参加ということで，院生9名と大学の先生方4名の計13名のカンファレンスとなった。福井大学が学園祭ということで，わたしが勤務する至民中学校の英語エリア（パープルクラスター）が会場となり，いつもとは違う雰囲気の中で行われた。

まず最初のオリエンテーションでは，前至民中学校校長の津田先生が，至民中学校について熱く語られた。学校の「へそ」つまり中心に特別支援学級である6組があるというお話が特に印象に残った。昨年この至民中学校に異動してきてからあまり特別支援学級がパープルクラスターにあることを意識したことがなかったが，「学校のへそ（中心）にある」意味を考えることができた。支援が必要な生徒と通常学級の生徒が共に生活する学校（社会）づくりを実現しているのである。実際今年度特別支援学級には3年生1名，1年生2名が在籍しているが，3名とも朝の会・帰りの会をはじめ給食準備や学級活動なども一緒に行っている。

次に教育改革の展開を吟味することの意味について，「今回読み解く資料をただ『読む』のではなく，日々の生活の中で起こる出来事と結びつけながら読み解いていくことで，学びを広げ深めていってほしい」と話された。

次に，資料をじっくりと読む時間となった。資料は①学習指導要領等の改善について，②児童生徒の学習評価の在り方について(報告)，③生徒指導提要，④教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策についての4つである。自分が興味のある資料をきめ，約80分間好きな場所で自由に読みふけった。英語エリアの大きなテーブルで読む人，ソファーでゆったりと読む人，さらにはベランダで外の空気を吸いながら読む人など様々である。わたしは，「授業における生徒指導」を研究テーマの1つにしようと考えているので迷わず資料③を選んだ。その資料の中に「教科における生徒指導」という節があり，その意義が書かれてあった，次の部分が印象に残ったので少し抜粋したいと思う。

「児童生徒にとって，学校生活の中心は授業です。児童生徒一人一人に楽しくわかる授業を実感させることは教員に課せられた重要な責務です(中略)児童生徒一人一人に自己存在感や自己有用感を味わわせるとともに，自尊感情を育て，自己実現を図るという重要な意義があります。(中略)教科における生徒指導推進の観点は，1.授業の場で児童生徒に居場所をつくる，2.わかる授業を行い，主体的な学習態度を養う，3.共に学び合うことの意義と大切さを実感させる，4.言語活動を充実させ，言語力を育てる，5.学ぶことの意義を理解させ，家庭での学習習慣を確立させる。」

その後のクロスセッションは，中学校と高校に勤める2人の若い先生と大学の柳澤先生，そしてわたしの4人で行われた。資料①学習指導要領の改善を選んだ先生は，「知識基盤社会やグローバル化」，「共存・協力」をキーワードとして挙げ，「子どもたちの現状と課題」については勤務する生徒と照らし合わせながら，自ら学ぼうとする意欲や自尊心の低い生徒が多いように感じると語っておられた。もう1人の先生からは，学習指導要領の改訂は早いのか遅いのかという問いが投げかけられ，柳澤先生を中心に4人で意見を交換することができた。後半は「生徒指導」をテーマに，生徒と教師が信頼関係を築くにはどうしたらよいのか，授業を通して生徒指導をするとはどういうことか，何ができるのかなど日々の教育実践を通して考えていることを語り合うことができた。

生徒にとっても我々教師にとっても学校生活の中心は「授業」である。普段行っている生徒指導に関する様々なことがわたしが読んだ資料の中にきちんと整理されて書かれており，わたし自身の頭の中も整理することができた気がする。また，クロスセッションを通して若い先生方の生の声や苦労を聴くことができ，明日からも「授業で生徒指導」を積極的に実践していく元気がわいてきた。

教職専門性開発コース1年／福井県立福井東養護学校インターン
合田　優

今年度2回目の合同カンファレンスに参加しました。4月とまた違った雰囲気がコラボレーションホールに広がっていました。4月はまだ芽が出始めたばかりのような初々しい雰囲気でしたが，5月は新緑が広がるような活気に満ちた雰囲気でした。スクールリーダーの先生方，ストレートマスターの私たちが，日々，各学校で教育に対する熱い情熱を抱いて，児童生徒と共に奮闘しているゆえだと感じます。

さて，「教育改革とは何か？」の問いから始まった合同カンファレンス。「災難」，「次々に新しいことが起きて大変」というイメージを持ちます。私自身が学校を変えるようなことはできるはずがない。「教育改革」という言葉がとても大きく，偉大なものに感じます。しかし，この「教育改革」というイメージが，合同カンファレンスの後に身近に感じるようになりました。「私なんかができるはずがない。」から「できるようになるかもしれない。」に変わったのです。

川上先生のお話の中で，教育改革に関する資料の読み方として，「背景・思想・筋を読み取る」，「文科省の意図を読み取る」，そして「自分との関連性を考えながら読み取る」が挙げられていました。単なる資料ではなく，読み方でとても奥深いものになることが分かりました。裏に流れている思想や方向性，教育改革のベクトルを考え深く読み取ることで，自分がどうしなければいけないのかという考えになり，結果この資料が自分にかえってくるのだと思うと，とても大切な機会なのだと実感しました。そこで「自分との関連性」を念頭に置きながら資料を読み始めました。読み取り方はまだまだ未熟で浅いですが，インターンシップで学んでいることを思い出しながら読みました。

その後，クロスセッションでは大学の先生方，スクールリーダーの先生方のお話を聴きました。話し合いの展開はこのようになりました。「答申って何だろう」→「評価って何だろう」→「教育って何だろう」。この手元にある4つの資料に対する疑問から，私たちが行っている教育に対する疑問にまで大きく広がったのでした。資料の中身はあくまでも行政が取りまとめたものであり，行政の文章を読んで自身を変えること自体が難しいのですが，じっくりと読みとくことで今まで自分が感じてきたことを改めて感じるのです。例えば，学校と家庭との連携や言語活動は前々から行ってきたことです。資料を読みとくことで，自分の実践を再構成するきっかけになります。つまり，今の子どもの実態はこうではないかと，改めて子どもたちの様子を振り返ります。自分の係わり方も同時に振り返ります。これが見直し，再構成です。

他にもここで挙げられないぐらい多くの観点についてじっくりと話し合われました。「児童生徒を評価する意義」「生きる力の漠然さ」「批判的な見方の良さ」「教師の専門職の在り方」等，ひとりでは考えてもみなかったことがクロスセッションの中で話され，圧倒されました。しかし，難しいと始め思っていたことが話し合いで咀嚼され，次第に自分のものになっていくのを感じるのが分かりました。合同カンファレンス開始前は，難しい資料を読み取るなんて…と思っていましたが，資料が身近なものに感じられたのはクロスセッション後でした。「できるようになるかもしれない。」という気持ちになったのでした。

教職大学院生としての生活が始まって2カ月が経過します。たった2カ月ですが，とても中身の濃い2カ月です。先生方や院生の仲間のおかげで，ひとりでは到底考えられなかったことに出会い，新たな自分の思いを再発見しています。今後，2年間，インターンシップやカンファレンスを重ねる度に新しい自分に出会えるのかと思うと胸が躍る気持ちです。

拠点校研究集会報告

教育地域科学部附属中学校第46回教育研究集会に参加して

スクールリーダー養成コース2年／福井市至民中学校
金鑄　善朗

今年も，附属中学校の研究集会に参加させていただきました。教職大学院に入学してから複数の学校の研究集会に参加するようになり，そのたびに新たな刺激を受けてきました。今回もどんな刺激を受けられるか楽しみに参加しました。

理科の授業を参観しました。3年生では，「Ｆ1グランプリ2011」を開催し，木炭電池をモータ付き自動車に乗せクラス全員で速い車を作る，という課題で探究がおこなわれていました。本時は，ジグソー方式で意見交換をしたあと，その意見を参考にし，計画を立てる活動でした。意見交換では，話し手の説明のあと，聴き手が自分の欲しい情報を対話の中で引き出していきました。質問から始まり，その答えに対して意見を述べ，自分たちの班の結果と比較しながら練り合いがおこなわれました。また，1年生では，校内の植物マップをつくり，その場所で生きるための植物の知恵を探そうという課題でした。本時は調べたことや実験で発見したことをまとめ，発表会をおこないました。どの班も上手に発表し，聴き手も聴き漏らさないよう一生懸命メモをとっていました。

今回の授業を参観して感じたことは，対話の重要性でした。対話をおこなうと，自分が知りたい情報を得たり，自分たちの実験の方向性や問題点が明確になったりして，次への活動がスムーズにおこなえていたように思います。また，良い対話には，良き聴き手が必要です。1年生と3年生では，3年生の成長がはっきりと分かりました。2年間で良き聴き手が育っているのだと思います。また，対話するためには，必要な情報をきちんと相手に伝えられなければなりません。自分たちが調べたことを伝える，1年生はすでにこの点がしっかりできていたと思います。すなわち，附属中学校ではいろいろな場面で対話活動をおこなうことで，話す力から聴く力を成長させていく，それを3年間通しておこなっていこうとする強い意志が感じられました。

至民中学校も「自分を，学校を，地域を語られる生徒」を目指しています。一生懸命に取り組めばある程度は語ることができます。しかし，良き聴き手を育て，数多く対話をおこなうことで，もっとよい活動に進化することができると思います。対話活動を充実することは，附属中だからできることではなく，至民中でもどの中学校でもできることだと思います。このことが今回の研究集会に参加して1番刺激になったことです。このことをいかして，明日からの授業も頑張っていこうと思います。附属中学校の先生方，ありがとうございました。

スクールリーダー養成コース2年／越前市武生第三中学校
坂下　博行

本稿では森田先生の地理の授業を参観して考えたことをまとめてみた。森田先生は「アジアのリーダーとなる国はどこだろう」という学習課題を設定し，人口やGDP額，工業，農業など多様な視点で資料を読み取り，アジアのリーダーとなる国の理由を明確にしていくという学習を展開していた。本時(第7時)はその調査内容を班内で報告しあう時間である。班の仲間の報告を聴いている時，残りの生徒は重要なキーワードや事実を付箋にメモをしていく。4人の報告が終わると，その付箋を思考回路図にまとめながら，班としての結論に導いていくのである。

授業の構造を「個の学び」と「協働の学び」という視点から，一部，推測も加えて整理してみる。第3時は班による協働で，アジアのリーダーとなるために必要な条件を話し合い，5，6時に行われる班別調査活動の視点と方法について見通しを共有化している。5，6時の調査活動の形態が「個」だったのか「班」だったのかは不明だが，「班」による協働だったとしても，それぞれの視点を分担した以上，「個」の学びに近い形態だったであろうと推測する。

それを受けての本時(第7時)の活動である。本時は「調査内容の報告」→「思考回路図づくり」→「合意形成」と，終始，協働による学びが展開されている。他者の報告を聴きながら重要なキーワードを付箋に書くことで他者の視点を得て，自分の視点と比較しながら，多面的に考察している。仲間と相談しながら思考回路図をつくっていく中で，他者の考えに触れながら，自分の考えを発展させている姿が見られた。そして，続く第8時から第10時では，各班の提案をクラス全体で共有化し，アジアのリーダーになる国について話し合う。そして自分のグループの考えを再構築するのである。

このように，「個」，「班での協働」，「クラス全体の協働」の学びが重層的になっており，他者の視点を何度も得ることによって，自分の考察を相対化し，より多面的に自説を再構築できるような工夫がされている。

これは附属中学校が主張している「主題－探究－表現」型の学習デザイン，すなわち，「①発意－②構想－③構築－④遂行・表現－⑤省察」を具現化したも

のであることがわかる。①～⑤の繰り返しによって，生徒がアジアの国々に対する学びを深めているのである。また，生徒は自分の考えを他者に語り，他者の考えをしっかりと聴き取ろうとしている。このコミュニケーションのやり取りが，①～⑤の学びの質を高めている。授業後の全体会で研究主任の高橋先生がおっしゃっていた「よき聴き手になることを重視している」という言葉が，授業の中で具現化されていると感じた。

一昨年，昨年，今年と，附属中学校の授業を参観させていただいているが，今回も，自分の授業へのヒントと新しいことに挑戦してみようという刺激をいただいた。

視点の変化を実感した日

教職専門性開発コース1年／坂井市立丸岡南中学校インターン
永田　恭子

今，自分が実際に現場で実習しているためか，学部生の頃よりも教師の視点で，焦点を絞って参観することができました。特に子どもの様子については，鍵となる会話や子どもの変容の実際など，子ども理解・授業づくりの点で重要と思われることをいくつも読み取ることができ，まだ数カ月ではありますが，現場で学ぶ意味の大きさを改めて実感した一日となりました。

公開授業（音楽）ではグループ活動の際，１つのグループについて会話・行動をすべてメモすることにしました。クラス全体を見ているだけでは分からない子ども１人ひとりの学び，グループごとの学びが見え，そこから授業の作り方に関しても考えることができました。分科会という時間を設けることで，参観者１人ひとりが見取った子どもの様子や情報を共有し，その授業についてさらに深く考えることができます。今回，私は研究集会の分科会で初めて発言し，積極的に参加していきました。そうすることで自分の見取ったことや他の参観者の方が見取ったことが繋がったり，授業づくりのヒントが少しでも見えたりして，あっという間に時間が過ぎて行きました。できればもうしばらく話していたかった程です。これまで分科会というものに対して，なんとなく話を聞くだけで参加した気になっていたため，もっと早く積極的な参加ができていたら，と今更ながら後悔しました。

現在私がインターンでお世話になっている学校では，教科・年代を超えた教員グループで授業研究がなされています。この日のシンポジウムでも，教員の協働研究は新しい視点を取り入れるという点で重要な取り組みであると話していました。あるひとつの教科だけを研究していると基本的な見落としや偏った視点での授業づくりをしてしまっている可能性は否めません。実際，私自身も経験しており常に様々な視点での研究が大切だと考えています。こうした教員同士の研究が子どもたちの探究心を育てるのだと思いました。子どもたちの「なんだろう？」「やってみたい」の気持ちを引き出すような教師の支えとは何だろうかと疑問に思っていた私にとって，堀川高等学校の話は大変有意義なものでした。急速に変わりゆく社会に対応するためには，教育も新しく変えていかなければなりません。福井でも教科センター方式の学校が増えたりして新しい取り組みをしている学校が増えています。環境の変化に伴い，子どもの支え方・教師の在り方について今一度考えさせられました。

今回の参観で，私が今課題としている子ども理解や学校・学級経営についてまた新しい視点を取り入れることができました。ここで学んだことを活かし，これからの実習をさらに学びあるものにしたいと思っています。

拠点校だより

福井県教育研究所

教職研修課　金森　誠

平成20年度から福井大学教職大学院の拠点校の一つとなったことで，全所員が集まり，グループ協議を中心にした「語り合い・実践・振り返りの場」＝『協働研究会』が構築されました。それまでは，学校のような職員会議もなく，意思の疎通が図りづらい面が多くありました。また，学校現場とは異なる仕事環境のために，慣れるまでに困難を感じる場面も少なくありません。そこで，教職大学院でのクロスセッションと同様に，所属課や校種が入り交じったメンバーでの協議の場を設定したことで，新たな見方・考え方，アイディアの共有，所員同士のコミュニケーションの活性化，同僚性の構築につながりました。また，ポスターセッションをはじめとする様々な協議手法を用いることで，研修担当者としての力量アップやファシリテーション能力の向上にもつながっています。

語り合いのための主題として，平成20・21年度には「研修機関としての研修・支援機能の充実」を，平成22年度からは「学校支援のための訪問研修ユニットの開発と活用」を掲げました。

それまでの課を中心とした業務推進では難しかった意識の共有でしたが，この『協働研究会』を通じて「学校訪問研修を拡充することで，校内研修を活性化し，学校の協働体制づくりを支援する。」との共通意識をもつことができ，この視点からの全所体制での研究も進んでいます。

中でも，「学校支援のための訪問研修ユニットの開発と活用」の研究は，全国教育研究所連盟（全教連：都道府県市町村等の教育研究所や教育センターの連合体。205機関加盟）の共同研究として，平成22年度より3カ年計画で取り組み，その進捗状況・成果を発表することになっています。

昨年11月には，全教連共同研究第1回全国研究集会（福井大会）が開かれ，全国各地から190名と例年以上の参加者が集まりました。本所は22年度の研究成果を発表するとともに，分科会グループ協議のファシリテーターとして全所員が活動しました。分科会でのグループ協議は，「フリーカードを用いた概念化シート作成→ＫＪ法を用いての焦点化→重要項目をクロス法で整理」という流れで進みます。20年度からの『協働研究会』での取り組みで，すでにコミュニケーションが活性化され，同僚性が構築されている所員は，忙しい業務時間を割いて自主勉強会を企画し，協議手法を理解し，他の全国大会では見られない充実した分科会協議を実現させました。

この大会運営を通して，所員は自身のファシリテーター能力を向上させたばかりでなく，学び合う集団への発展を遂げたように感じます。また，次年度の講座計画を立てる際にも「○○県では，△△のような研修を企画している。□□の手法も有効らしい。」と，大会を通じて構築したネットワークを生かした，前例踏襲にとらわれない視点からの企画や意見が生まれるなど，所員自身の講座運営・企画にも大きく寄与しています。

どの所員も現在の業務に多忙感を感じていることから，会議・協議時間は少ないことを望んでいます。しかし，所員の任期も短いことから，既存の手続きの伝

承・習得だけでも相当な時間が必要となります。このような状況の中ですが，「学び合う所員集団」としての意識や協働体制を維持し，より密度の濃い協議・創造ができるような運営を心がけていきたいと思っています。

福井県教育庁嶺南教育事務所

研修課　赤城　美紀

嶺南教育事務所は，嶺南の2市4町(敦賀市，小浜市，美浜町，高浜町，おおい町，若狭町)を所管地区とし，福井県の教育方針を基盤にして，嶺南の教育課題に応えるため「総務課」，「指導相談課」，「特別支援教育課」，「研修課」の4つの課で，それぞれの業務に取り組んでいます。

当事務所の教育方針として，◆市町教育委員会との連携を密にし，地域社会から信頼される魅力ある学校づくりの推進，◆総合的な学力の向上，心身ともに健やかな体の育成，人権意識の高揚を図り，生きる力の育成を目指す学校への支援，◆一人一人のニーズに応じた適切な教育体制への支援，◆教職員研修の充実と今日的課題の調査研究の4つが掲げられており，私が所属する「研修課」では，特に「教職員研修の充実と今日的課題の調査研究」について，大きな役割を担っています。その業務の中から，主なものについて紹介します。

まず1つめは，「魅力ある研修講座の企画・運営」です。嶺南地区のすべての教職員を対象に，今年度は全38講座64コースを開講します。学校現場の多忙化がますます進む中，多くの方が受講しやすくするため，また，ニーズや課題に対応するため，さまざまな工夫と改善を行っています。①年間受講者数800名以上，②(1人)3年間で2回以上受講，③(1人)3年間受講0の解消[※②，③は県内3研修機関において]を具体的な数値目標にして取り組んでいますが，やはり一番の目標は，受講された方が満足され，明日からの子どもたちの指導に生かしていただくことです。「受講してよかった」「元気が出た」「子どもたちの指導に役立つ」「他の先生方にも伝えたい」･･･このように研修の輪が広がり，つながっていくことを願い，企画・運営に当たっています。

2つめは，「校内研修等への支援」です。教科指導をはじめ，人権教育，教育相談，生徒指導，情報教育等の研修を支援しています。さまざまな学校，多くの教職員の方々と，近い距離でともに研修することで，刺激を受け，学ばせていただくことがたくさんあります。

3つめは，「教育課題の解決に向けた調査・研究」です。嶺南地区の教育課題や今日的な課題に即した研究を，5名の研究員が行っています。また，それぞれの課員も自分の研究課題を持ち，講座や課内研修で広めたり研修支援の要請に応えたりできるよう努めています。そして，これらの研究がより実践的なものになるよう，課内での検討や振り返りを大切にしています。

平成24年2月2日(木)に行われる教育研究発表会において，研究員がその成果を発表しますので，多くの皆様に御参加いただき，御意見をいただければ幸いです。

今年度，研修課は「協働・創造・意気」をテーマとしています。それに向かう4つの努力目標「目標を持ち，進んで」，「チームワークよく」，「風通しよく」，「評価により改善を」は，昨年度からぶれることなく各課員の中にしっかりと定着し，業務の中で実践されているところです。今後は，さらに同僚性や協働性を高め，全員が一丸となってよりよい業務を創り上げるとともに，私たちの取組を積極的に示し，発信していくことをめざしています。

拠点機関となってから，定期的に行われている教職大学院のカンファレンスでは，主に研究について，年齢や立場に関係なく全員が活発に意見交換をしています。そして，思いを率直に伝え合うことの心地よさや，課題についてみんなが真剣に話し合う中で，互いの考えが深まり，思いがけないすばらしいアイデアが生み出されたり，よりよく改善されたりすることの喜びを実感しています。今後は，この感覚をもっといろんな場面に広げたり，自分たちに合った学びのサイクルとして形づくったりしていけたらと思います。私たちの職場には子どもはいませんが，よりよい研修の機会を提供できるよう工夫・改善の努力をする中から得られる学びを，さらに充実させ，私たち自身が，学び続ける教員集団としての姿を，内にも外にも示していきたいと考えています。

坂井市立丸岡南中学校

遠藤　正宏

本校は，平成18年4月に全国屈指のマンモス校であった丸岡中学校から分離新設した，開校6年目の新しい中学校です。県内初の教科センター方式を採用した学校で，メディアスパイラル方式で建てられた斬新な校舎，全校生徒が一堂に会してとるクックチル方式の給食，そして異学年縦割り集団であるスクエア制を中心とした生徒会活動といった特色を持っています。

すべての教科が専用教室とメディアセンターを持ち，教科特有の学習環境を作り出しています。メディアセンターとは各室に開かれたオープンスペースで，図書・プリント・資料・情報機器などが用意され，授業で使ったり，生徒が休み時間に自由に使ったりしています。また，各教科の教員が常駐し，生徒の相談や質問に気軽に応じ，生徒の自主的な学習を援助する場となっています。

メディアスパイラル方式とは，学校の中心である図書館を起点として，中庭を囲みながら立体的・連続的に多目的ホール，コンピューター室，ランチルームなどのオープンスペースや各教科のメディアセンターをらせん状につなげた方式のことです。廊下はすべて行き止まりのない設計になっており，単なる移動するための空間ではなく生徒の居場所であり，生徒同士や教師との出会い，コミュニケーションができる生活空間としての豊かさを生み出す場として活用できるようになっています。

集団の中で自主性と自律性を育てることを目的に，スクエア制と呼ぶ異学年集団による活動を取り入れています。ホームルームの配置を学年をばらして5つにまとめ，それぞれ「花」「鳥」「風」「月」「宙」と名付けたスクエアを構成しています。年度初めにはレクレーションを中心とした「スクエアＤＡＹ」が設けられ，学年の壁のない楽しい1日を過ごしています。毎日の清掃や給食，体育祭や文化祭等の学校行事の他，特別活動においても，内容や目的に応じてスクエアによる活動を行っています。また，生徒会長1名と，各スクエアから選出されたスクエアリーダー，サブリーダーが生徒会執行部として活動しています。

また，本校では，開校以来3年間を一区切りとして自主研究に取り組んできております。昨年度は，研究主題「学び合う環境の創造」を目指しての2年次を終了しました。11月2日（火）に自主研究発表会を開催し，県内外から多数の参観者の先生方にお越しいただき，大変ありがたい意見をいただくことができました。本年度はまとめの3年次として，昨年度同様「授業づくり」を中心に，「グループによる少人数での学び合い」に焦点をあてて研究・実践をすすめております。今年度からは研究主任の渡邉と副主任の私が，福井大学の教職大学院で学ばせていただいており，拠点校としての連携協力をはかっているところです。特に今年度も，教員同士の学び合い，という視点にも力を入れ，教職員同士の公開授業をスタートさせております。まだまだ拙い研究ではございますが，今年度も11月17日（木）に自主研究発表会を開催いたします。是非，今年度もたくさんの方々に参加いただき，ご指導いただき，ともに学び合いたいと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。

Staff 紹介

今年度から新しく加わった教職大学院のスタッフを紹介します。今号からは，協働研究員として関わる先生方の歩みや思いを語っていただきます。

大山　利夫　　おおやま　としお

理数教育講座で生物学を担当している大山です。昨年，教職大学院に生物を専門とされる先生が入学されるということで教職大学院の協働研究員となり，今年度も同様の立場で教職大学院に係わることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私の出身はこの度の震災で大きな被害を受けた岩手，宮城，福島に隣接する山形です。大学まで山形で過ごしました。子どもの頃から，三陸，宮城，新潟はたびたび大きな地震に見舞われ，そのたびに大きな揺れを経験してきたことを思い出します。大震災が起きて以来，東北の様子が気にかかり，心の晴れない日々を送っています。一日も早い復興を願うばかりです。

私が名古屋大学の大学院を終えて福井大学に助手として赴任したのは1987年です。それ以来24年間福井大学にお世話になってきました。この間，多くの学生諸君と出会い，教員の方々からも多くのことを学ばせていただきました。そして，スクールリーダー養成コースに入学される現職教員の皆さんの中にも懐かしい顔を見つけることができるようになってきました。私が赴任した当時の教育学部は優秀な学生が多く，今や中堅となって福井県の教育界を支えているということを改めて実感している次第です。

私の専門は細胞生物学とよばれる分野です。大学院時代から，精子(花粉)や卵がつくられるときの減数分裂という特殊な細胞分裂の仕組みについて研究してきました。減数分裂自体は動物でも植物でも酵母などの微生物でもみられる普遍的な現象なので，研究材料には，ネズミも使うし，ユリなどの植物も使うし，酵母なども使ってきました。このため，生物系以外の方から専門は動物か植物かと訪ねられると返答に窮することもしばしばありました。赴任後しばらくは研究中心の日々でしたが，教育学部という分化の中で意識が教育の方へとシフトしていきました。そのきっかけとなったのが卒業生の一言で，私から習ったことは専門的すぎて学校の現場では役に立たないという趣旨のものでした。確かに当時の私の専門の授業は理学部的なもので，教員養成ということを意識せずに学生に知識を押し売りしていたことは否定できません。自分の狭い専門領域の話をしていれば教える方も楽という意識もあったのだと思います。これが契機となって自分の専門以外の領域にも眼を向け，学生の視点に立った授業を意識するようになりました。とは言うものの，未だに満足のいく授業ができていないというのが正直なところです。

生物の授業の中で学生に接していると，最近の学生は以前に比べてずいぶん様子が違うなと感じることがよくあります。子どもの頃から，物に恵まれて育ち，自然の中で遊んだというような体験や生活の中での経験が不足しているせいなのでしょうか。身の回りの動植物のことを知らない，触れたこともない，特に昆虫やカエルなどの動物は気持ち悪いと思っている学生が多くなってきています。たとえば，マメ科植物の窒素固定の説明するときによく大豆を例に出すのですが，枝豆が大豆であることを知らない，違うものだと思っている学生が意外と多いことにも驚かされます。福井県では，小学校3年の国語の説明文「すがたをかえる大豆」の中で学習しているはずなのですが，知識として残っていないようです。同じく3年国語の中に「ありの行列」という教材があり，3年理科では「昆虫のからだのつくり」について学習します。ところが，学生にアリの絵を描かせるととんでもないものが出来上がってしまいます。これらのことは，学びが教科の中で閉じており，互いに連関していなかったことによると思われます。幸いにも今の初等・中等教育では，小学校低学年の生活科にはじまり，生活に密着した探究・体験型の学習が多く取り入れられ，さらに教科を越えて，言語活動を通した思考力の育成が謳われています。学習指導要領通りに教育が実践されれば，近い将来，豊かな生活経験とそれに基づく柔軟な思考力を備えた学生が多く入学してくることになるのでしょう。

私は大学以外での教員の経験がないので，今までに研究授業等の参観以外で学校現場に係わることはあまりなく，ＳＰＰ等で高校生や中学生相手に授業を行う程度の活動しかしてきませんでした。3年前から始まった教科教育専攻の協働実践研究プロジェクトでは，国語の松友先生，化学の淺原先生とご一緒させていただき，「小学校理科における言語力(思考力)育成」という課題で活動しています。お二人のおかげで，今まであまり縁のなかった一般の小学校にも足を運び，国語や理科の授業に触れる機会を与えていただきました。そしてこの活動を通して初等教育の重要性を改めて認識することができたように思います。教職大学院では，本年度は啓新高校にお世話になります。教職大学院本来の趣旨からはずれますが，高校生の語彙力や思考力についても考える機会になれば有難いと思っています。

院生 紹介

今号からは，今年度新たにスクールリーダー養成コースに入学した院生の皆さんから自己紹介をしていただきます。

赤澤　清和　あかざわ　きよかず　（南越前町立南条小学校）

本年度より，福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました，南条小学校の赤澤清和です。

平成元年に採用され，平成と同じだけ教員生活を続けています。というわけで，教員生活も23年目を迎えています。しかし，現在の自分はというと，23年という年月をしっかりと歩んできたのかと，考えさせられることが多くあります。

例えば，自分が新採用だった時のことを振り返ってみれば，自分の側には尊敬できる先輩の先生や何でも相談に乗ってくれ指導してくれた管理職の先生の存在がありました。その先生方は，新採用の自分から見れば神様のような存在だったように思います。その先生方のおかげで，不安だった教員生活もしっかりと歩み出すことができたのではないかと感じています。ところが，今自分がその立場に近くなり，はたして上手く学校の中で自分の役割が果たせているのだろうかと疑問を感じずにはいられません。自分は，これからの先生達に対し何を示していけるのか，そして学校の中でどのような存在であるべきかなど考えさせられることばかりです。そんな時に，この教職大学院のお話をいただき，スクールリーダーとしての役割をどのように果たしていけば良いのかを，ここで勉強させていただこうと考え入学を決意しました。

また，この教職大学院に入学と共に今年度より研究主任をすることにもなりました。本校は，11月に郡内で自主研究発表会を控えています。研究主題は「人とのつながりあいの中で，ともに学び合う子どもの育成」で，「自分の思いを持ち　聴き合い　つたえ合える子を目指して」のサブテーマのもと日々取り組みを行っています。是非その中に，教職大学院での学びを活かしていきたいと考えています。「子どもの学びを見取りながら進める授業研究」や「教員同士が語り合い協働して取り組む授業研究」などを目指していきたいと思っています。とは言え，まだスタートラインに立ったばかりと考えていますので，大学院の先生方や同じ院生の方たちにいろいろな教えをいただきながら，この研究を今後深めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

岩堀　美雪　いわほり　みゆき　（鯖江市立待小学校）

はじめまして。今年度教職大学院スクールリーダー養成コースに入学させていただいた，岩堀美雪です。現在，鯖江市立待小学校で3年生を担任しながら通っています。私は，今年度で教師になって28年目を迎えることとなりました。教師は，子どもたちに色々なことを教えることが仕事ですが，逆に子どもたちから教えてもらったこともたくさんあります。その中で，自分にとって最も影響が大きかったものは，「どの子にも必ずよいところがある」ということです。算数が得意な子，体育が得意な子，友達思いで優しい子，ユーモアのある子，音楽が好きな子等々，個性豊かで，一人一人が輝いている子どもたち。そんな子どもたちが中学校へ行く時私が一番願ってきたこと，それは，「学力だけが全てじゃない。あなたには，学力では測りきれない素晴らしい人間性がある。それを自分で認めて，自信を持ち，自分のことをずっと大好きでいてほしい。」ということでした。もう自分の手を離れて巣立っていく子らを祈るような思いで送り出してきました。しかし，傷つき，変わっていく子どもたちも見てきました。久しぶりに会いに来てくれたのに，昔のかわいい面影はどこへやら。眼光鋭く，眉は細く，口数少なく・・・。ここに来るまでにどれだけのことを乗り越えてきたのか。私にはとても痛々しく感じました。そして，「長所がたくさんある子なのに，なぜ？」悔しい気持ちと無力感でいっぱいでした。

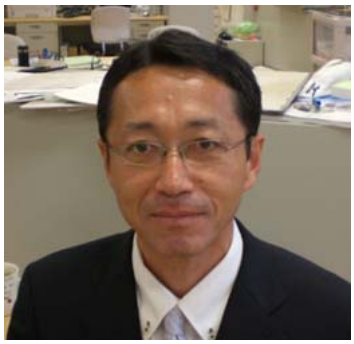
そんな私が，2000年の10月の終わりに，パーソナルポートフォリオに出会いました。以来これを使って，子どもたちの自己肯定感を育てる実践をずっと行ってきました。最初はだれにも注目されず，細々と続けてきたのですが，ありがたいことに最近では学校やＰＴＡの方々のみならず企業からも話を聞きたいという依頼が来るようになりました。しかし，昨年，まだまだ自分の研究に足りないものが見えてきました。そこで，さらに学びたいと考え，この福井大学教職大学院を受験しました。久しぶりの母校は，以前とは比べ物にならないくらい校舎内が明るくなってびっくりです。そこで行われる合同カンファレンスは，いろんな先生方の体験や考えをお聞きすることができてとても楽しいです。せっかく入学できたのだからと図書館にも出没してます。と，こんな私ですが，どうぞ気軽に声をかけてくださいね。2年間どうぞよろしくお願いします。

森　克彦　もり　かつひこ　（福井県立坂井農業高等学校）

こんにちは。本年度4月より福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースで学んでおります坂井農業高等学校の森克彦です。教職に就いて27年目を迎えた農業の教員です。

大学卒業後，現在の伊勢市にあります三重県立明野高等学校に赴任しました。2年間という短い期間ではありましたが，辞令をいただく前から，見知らぬ先生・生徒と共に高校野球の応援で甲子園に行ったことや，船で家庭訪問に行ったこと（答志島）等は貴重な体験で懐かしい思い出です（昨年まで巨人軍で活躍していた大道選手はその時の生徒でした）。福井に戻って最初の勤務は嶺北養護学校高等部で，3年間お世話になりました。特別支援学校でありましたので，どう接すればいいのかすら全くわからず不安のスタートでしたが，時間の経過と共に，私の生きる道はここにあるのでは？と思えるほど充実していました。生徒8名を教員4名で担当する比較的重度のクラスでしたが，生徒の素直さがうらやましく思える場面に何度も遭遇することができ，先生方のチームワーク等全てが新鮮でした。その後，現在の坂井農業高等学校に勤務して22年目を迎えました。教員になりたての頃は，きっと30歳くらいになれば何の迷いもなくスムーズに授業ができ，40歳にもなれば余裕が出てくるに違いないと思っていました。しかし，現実は厳しく満足できることはありません。悪戦苦闘の日々です。毎日が新鮮な「発見」と「疑問」，「戸惑い」の中で，問題解決に向けての「学習」の連続です。教員になってからの年数は経っていますが「井の中の蛙大海を知らず」の状態でありますので，今回このようなチャンスをいただくことができました。リクルート社の旧社訓「自ら機会を創り出し，機会によって自らを変えよ」に習って，自ら変革の機会をつくり，その機会の中で発見した課題によって自らを変え成長させていければと考えております。まだ始まったばかりですが，教職大学院でしっかり学んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

中谷　忠裕　なかや　ただひろ　（福井市至民中学校）



アラフィフ（Around Fiftyの略）になっても大学で学べる機会を与えていただいていることに感謝しています。子どもたちに学ぶ意義を伝える職にある者として，自身も絶えず学ばなければと思っていますが，日々の業務に追われ，忙しさを理由に学びから逃避していたのではと反省しています。福井大学教職大学院に在籍させていただき2ヶ月あまりが過ぎました。4月と5月の2回の合同カンファレンスを経て，じっくりと「読み・聞き・書く」作業に没頭できる時間がとても新鮮で，自身のリフレッシュにもつながっています。

勤務する至民中は福井大学教職大学院の拠点校として，斬新な設計思想に基づく校舎で実践研究をすすめています。「学習と生活の融合」というテーマで，協働的なグループ活動を取り入れた至民型問題解決学習と異学年で生活を共にするクラスター制をとっています。そこでの一人ひとりの意見が活かされる双方向のコミュニケーションと異学年間で文化を継承生成するコミュニケーションにより，学習と生活が一体のものとして生徒に自己肯定感を育もうとしています。昨年度赴任して校舎の造りはもちろんのこと，「建築は教育を変える」を念頭に置いて，従来の中学校教育に新たな風を巻き起こそうとしていることに驚きました。生徒たちは，朝登校すると自分の居場所であるホームに入ります。ロッカーに荷物をかたづけると朝読書が始まります。班ごとのテーブルに向かい静かに生徒は読書に集中しています。私物を入れる個人のロッカーには鍵がかかりませんが，持ち物がなくなった話は皆無です。これまで，生徒を管理することばかり考え，開放的な空間で生徒たちは集中して学習に取り組み，規律ある学校生活をおくれないのではと危惧していました。しかし，生徒たちの姿を見ていると，その不安は教師の固定観念にすぎず，そのような場に置かれても，生徒たちは学習と休憩時間での仲間とのふれあいを区別することができるようです。

私の目に映った生徒の当たり前のように自然に動いている姿は，新しい校舎で生徒が生活しながら独りでにうまれたものではありません。私は，移転開校して3年目に赴任しましたが，旧校舎で生活していた頃から生徒と教職員が新しい校舎での生活スタイルやその意義について話し合っていたそうです。学習においても，「なぜ学ぶのか」ということや学び方を各教科で考え，ＳＳＬ（simin study life）と称している冊子にまとめました。ＳＳＬを読んだ生徒たちは，教科での学ぶ意義を知り，至民中でのライフスタイルの在り方を学んでいるのです。

至民中学校でも異動により，以前の至民中を知っている教職員が十名を割っています。当たり前になっている至民中の学びと生活のスタイルの理由や意義を，問い直す必要がありそうだと同僚と話しています。至民中の教職員の合い言葉は「前例を踏襲しない」です。安易に同じことを繰り返さないだけではなく，「なぜ，その活動が行われているのか」を問い直しながら日々の実践をすすめたいです。

澤崎　秀之　さわざき　ひでゆき　（越前市武生第一中学校）

こんにちは。今年度から福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースでお世話になることになりました澤崎です。今回この院生自己紹介の原稿を書くにあたって，実はとっても困りました。何に困ったかというと，毎年，中学校での4月の授業開きの際に，生徒たちに「澤崎ジェームズです。年齢は今年32歳。（もちろん見た目で自分はそう見えているという自信の上での発言！生徒たちはすかさず嘘を指摘しますが…そんなこと気にはしません。）好きな物は○○，嫌いな物は△△。（途中省略：生徒の挑発に乗せられていろいろプライベートまで話さざるを得なくなり，慌てて）1年間頑張ろう！」などと締めくくり，平気で喋っているのですが，今回はこの原稿が書けません。真面目に？素直に？自己紹介をするために何もネタ（決して不謹慎な意味ではありません！）がないのです。

もちろん私も二十数年前を辿れば，この福井大学教育学部の卒業生で，教職大学院の試験の際も久しぶりの学内を感慨深く歩いたのですが，改めて今，自分のことを振り返ってみると自分は何ができるようになったのか，はたまた，何を蓄積してきたのか。教科指導や学級経営，学年経営，生徒会活動，進路指導，部活動指導に地域との交流，…どれもその時期，その時期で突っ走ってきたのですが，冷静に立ち止まって，何ができるの？って言われると答えられないもどかしさがあります。学校での教育実践を継続しながら，教職大学院で様々な方と意見交換をし，過去の実践研究や現在の実践研究に触れ，その中からもう一度自分の実践を捉え直す。入学するまでの不安はかなり大きかったのですが，合同カンファレンスなどで校種の違う先生方から研究の視点を示唆して頂くことが多くあり，今の自分を問い直すにはまさに絶好の機会です。4月や5月のカンファレンスでは，小学校や高校，養護学校の先生方，ストレートマスターの方から，新鮮な示唆を数多く頂きました。カンファレンスの中での話し合いは時間の経過をも忘れてしまうくらい熱い議論が交わされました。自分の視野が狭く，発想が豊かではなかったことを不思議と冷静に受け入れることができる時間になっています。また，この定期的なカンファレンスが現場での自分の教育実践を冷静に別の角度から考える“大切な時間”になっています。この2年間の教職大学院での学びから自分が何ができる教員になっているか改めて確認してみたいと思っています。試行錯誤の連続ですが，どうぞよろしくお願いいたします。

浅野　尚美　あさの　なおみ　（福井大学教育地域科学部附属小学校）

私は，ようやく教職大学院に入学することとなりました。附属小学校に勤務し，多忙を理由に入学を避けていましたが，いろいろと環境が変わったことで，それが可能になりました。また，本校に勤務して7年目となる現在，私の職場での立場が，当然，変わってきました。担任の中では，年齢も経験も一番上になり，今までのように，自分のクラスのことや自分に与えられた業務だけでは済まなくなったのです。

4月の合同カンファレンスで，自分のこれまでを振り返る機会を得ました。上味見小学校に籍を置き，僻地3校の音楽専科としてスタートした教員生活は，すべての学校での勤務が，今の自分の礎であると考えます。こうして振り返ってみると，常に，子どもの成長に寄り添おうとしている自分，そして，子どもと共に成長し続けている自分がいるように思います。それを支えてくれていたのが，教師集団としての「コミュニティ」でした。そこには教師の「協働」が息づいていました。諸先生方は，時には厳しく，しかし，基本的には温かく，若輩者の私を育ててくれました。

その後，私は，附属小学校転勤となりました。20年近く公立の小中学校で教員生活を送り，実践を積むことで培ってきた私の『教育理念と技術』は，初年度の6月に行った授業公開で，無残に打ち砕かれることになりました。授業1時間だけではなく，一題材をすべて参観された後に授業研究会をするこの研究スタイルに，私は恐怖を感じていました。授業が怖くて，不登校になりそうでした。しかし，授業研究会では，子どもに寄り添うこととはどういうことなのかを学び，子どもの呟きに耳を傾けることの大事さに気付くことができました。附属小学校の研究に出会い，教師主導の授業から，子どもの学びを大事にする授業への転換を図ることができたのです。新たな「協働」の始まりでした。私の授業スタイルの変遷は，教師の協働そのものです。各学団の教師の協働はもちろん，私の家庭科の実践では，尾崎栄養教諭との協働もなくてはならないものです。

日々，新しい協働を構築している中，私は中堅教員研修を受講する機会を得ました。そこでは，今までの私の視点になかったミドルリーダーとしての役割について研修することができました。さらに，全国の志を同じくする人たちとの協働を学ぶことができ，勇気づけられました。さらに，福井大学の教職大学院において，スクールリーダーとして，多くの文献や仲間や大学の先生方に出会い，じっくりと学びを深めることができています。

以上のように歩んできた今，私が目指すべきところは，協働研究を支えるスクールリーダーとしての組織力・運営力・マネジメント能力を意識し，高めていくことです。そして，不安一杯で附属小学校に来て，訳が分からずにいた私を支えてくれた先輩の先生方のように，若い教員を支え，力量形成に役立つことです。そして，「協働して学びを深める授業をつくる」研究を通して，生き生きとした児童の顔を見ることが，たまらない喜びです。

中谷　幸子　なかや　さちこ　（福井市豊小学校）

「中谷さん，今ここでしていることをこれからどうやって生かしていこうと思っている？」昨年度の9月，教育研究所の加藤副所長（現　藤島中学校長）に尋ねられたことが，教職大学院に入学するきっかけでした。昨年度，教育研究所で道徳や外国語活動の研修講座を担当しながら，研究員として「『英語ノート』を活用した小学校外国語活動の在り方とこれからの教員研修」というテーマで研究する機会を与えていただきました。学校にいるときとは違った視点から，今までの自分の教師としての在り方を振り返ることができ，2年間ではありましたが，とても充実した日々を送ることができました。一方，学習指導要領の改訂によって生じる様々な問題点も教職員研修を通して感じました。特に，小学校外国語活動に関しては，指導に当たる5･6年の先生方の戸惑いは大きく，コミュニケーション活動を楽しむ子どもを育てるための手立てについて，もっと情報を共有し合える場があればと思っていました。声をかけていただいたのが，まさに，そう感じ始めていた時だけに，ふっと「教職大学院で自分の実践を振り返り，それについて多くの方からご意見をいただけることは，またとないチャンスかもしれない。」と思い，入学を決意しました。

そして，本年度，福井市豊小学校に転任し，現在6年生を担任しています。豊小学校は教職大学院の拠点校でもあり，しかも自主研究発表会を開催するなど，「研究校」としてのイメージをもたれる方もいらっしゃるのではないでしょうか。確かに，今まで培ってきた豊小学校の研究の進め方には学ぶことが多く，前向きに取り組もうという教職員の意識を強く感じます。子どもを主体とした研究を進めるために，教職員が実にオープンに話し合い，サポートするシステムが整っています。このような職場で，豊小学校の先生方と実践を通して学び合えることは，私にとって，とてもラッキーなことです。6月の指導主事訪問では，外国語活動の提案授業をもとに，ワークショップ型による校内研究会を行います。授業の進め方だけでなく，校内研究会のもち方についても，多くのアドバイスをいただきました。他の先生方と話し合う中で，今自分がしたいことに改めて気づかされることが，何度もありました。今，自分は何をしたいのか，そのためにどう進めていけばいいのか，これからも悩むことばかりだと思います。しかし，迷った時に，ともに話し合える仲間がいるということをとても心強く感じています。これからも迷いながら，一歩一歩進んでいきたいと思います。

朽木　史昌　くつき　のぶあき　（高浜町立青郷小学校）

本年度，教職大学院スクールリーダー養成コースに入学した朽木史昌です。今年で教員生活23年目を迎えました。新採用以来，高浜町内の小学校や小中併設校で勤務してきました。同和教育の実践研究を土台として，「ふるさと学習」や「キャリア教育」などそれぞれの学校の特色を生かした取り組みに携われたことが印象に残っています。また，高浜町教育委員会では2年間，派遣社会教育主事として社会教育を担当しました。そこでは，地域のみなさんが取り組んでおられる青少年の健全育成やまちづくりにかかわることができました。人との出会い，人とのつながりの重要性を再認識させられた2年間でした。

その後，日本人学校教員としてベルギーにあるブラッセル日本人学校で3年間勤務しました。全日制と補習校が校舎を共有するブラッセルにおいて，様々な言語環境の下で学ぶ子どもとそれを支える保護者の姿から，海外で生活し学ぶことの厳しさを実感しました。また，全国各地から派遣された教員や日本人会の方々との交流は，私の教員としての人生観を大きく変えるものになったと思います。

帰国後は，現任校である青郷小学校に勤務し，生徒指導主事を担当しています。昨年度，1年間児童の実態について把握していく中で，子ども同士の人間関係が希薄化してきていると感じています。そこで，学校では，地域･保護者のみなさんと協力しながら，子どもたちが共に支え合う人間関係づくり，集団づくりに取り組んでいきたいと考えています。一方で今年度は，教育委員会より「コア･ティチャー養成事業」の指定を受けました。昨年度までの研究との継続性を意識しながら国語のＰＩＳＡ型読解力向上のための取り組みを進めています。

教職大学院での学びは，今までの自分を改めて見つめ直すよい機会となっています。4，5月の合同カンファレンスでは，大学院の先生方をはじめ様々な学校の先生方と自由に話し合いをし，実践を「語る･聴く」，実践記録を「読む･書く」ということについて学びました。この教職大学院での学びを，自分自身の授業実践や教師間の協働体制づくりに生かしていきたいと考えています。2年という期間になりますが，どうぞよろしくお願いいたします。

川榮　やよい　かわえ　やよい　（福井市足羽第一中学校）

今年度，福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました川榮やよいです。教員になって26年経ちました。国語科です。思い返せば，小学校に6年間，中学校に20年間，それも小規模・中規模・大規模・小中併設校と，いろんな学校に勤務してきました。

この3月までは福井市殿下幼小中学校に5年間勤務しておりました。そこでは，中教研での予防的教育相談の発表や特別支援コーディネーターとしての仕事，幼小中12年間の学びを見据えた学習や，白川文字学など，様々の新しい仕事をさせていただきました。

また，中学校で15年以上学級担任をしてきて，生徒たちと関わる仕事が楽しく，定年までずっと学級担任をしたいと思っていましたが，2年前に教務主任になりました。生徒たちと直接関わる仕事が減り，当初は寂しさを感じはしたものの，学校全体に関わる仕事をする中で，責任は重くなったのですが充実感を味わい，昨年度，福井県教育研究所の「ミドルリーダー研修　学校経営力向上研修」を受講しました。講師の名城大学の木岡先生の研修内容は，一つ一つが今までの教員生活と照らし合わせて大変納得できました。たとえば，大規模の中学校で生徒指導に奔走し，目の前のことに対応することに終始して「ただこなすだけ」のような日々は，教師集団がビジョンを共有し，組織力を発揮した教育活動が不十分な状態であったことに気づきました。また，違う校種の先生方と話し合う演習が楽しく，もっと学びたいと思いました。同時に，生徒指導上も特に大きな問題のない学校に勤務して5年目で，いわゆる「成功の罠」にはまり，新たな成長・進歩を志向していない自分を自覚できました。

そんな時に，教職大学院1年目の，以前同僚だった先生に教職大学院のことをうかがい，自分も成長したいと入学を志願しました。この4月から中規模の中学校に異動になり，中3の担任，総合的な学習，図書館教育などたくさんの仕事を担当し，また，「コミュニケートする子どもたちをめざして」という研究主題の下，自らの授業を見直しているところです。

教師教育ネットワーク・交流のひろば

このコーナーは，全国各地で教師教育に取り組んでいる教職大学院や既設大学院等の実践と研究を交流する広場です。今号では，大阪教育大学大学院の取り組みを紹介します。たくさんの投稿を期待しています。

大阪教育大学大学院・実践学校教育専攻（夜間大学院）

「教師の学習コミュニティ」に集うスクールリーダー

大脇　康弘

夕刻になると「おはよう」「おはようございます」のあいさつで天王寺キャンパスは活気づく。授業開始間際になると，学部生に交じって年長の現職教員が足早に教室に向かう。昼間の学校現場の格闘を離れて，大学正門から教室までは実践的・意思決定的思考から理論的・実証的思考に切り替える貴重な時間でもある。ここは全国唯一の夜間の教育学部・大学院である。学生数は学部生約400名，大学院生約60名で，教員26名は教育・心理から教科教育，教科専門までカバーする「ミニ教育学部」である。

夜間大学院・実践学校教育専攻は1996年に現職教員の「学びの場」として設置され実践を重ねてきたが，2007年には「教師教育の高度化・重点化」をめざして，「教師の学習コミュニティ」を理念に「学校づくり・授業づくり・教師づくり」を理論的・実践的に学ぶ三コース制を導入した。これまでの1専攻1専修を，Ａ．スクールリーダー・コース（ＳＬＣ），Ｂ．教職ファシリテーター・コース（ＭＴＣ），Ｃ．授業実践者コース（ＦＴＣ）の三コースに分化した。定員は20名から30名に拡充された。この再編は教職大学院の趣旨を先取りするものであり，独自のプレゼンスを打ち出すものであった。

カリキュラムは「広領域多選択型」を特徴としており，各コースの必修・選択科目が制約されているので，内容領域ではなく方法論に基づいて Theory, Case Study, Project, Internship の立体的構成を採用した（表1参照）。これは研究的認識と反省的実践を切り分けた上でリンクさせるもので，働きながら学ぶ現職教員の学習には効果的と考えた。

専攻の理念である「教師の学習コミュニティ」は，①理論知と実践知の交流，②多様な院生が学びあう共同性，③教育研究者と教育実践者との協同，④大学と教育委員会との連携を軸に形成される。それは「教育実践者と教育研究者が協同して教育現象と教育課題にともに考え立ち向かう時空間」であり，それを創り出す協同的・文化的営為といえる。院生と教員がこれをバックボーンとして「学びの場」を創り出すプロセスが重要である。この集団的学びを通して現職教員は教育を新たな目で見つめ，未来を切り開く鋭気を養うことになる。

表1　3コースの専門科目の構成（SLCの科目を例示）

a. 理論と方法 (Theory)：理論と実証的分析―「学校マネジメント学」
b. ケーススタディ (Case Study)：典型的事例を素材にした研究協議による学習―「学校評価」
c. プロジェクト (Project)：テーマを設定して問題探求に取り組むグループ学習―「学校づくり」
d. インターンシップ (Internship)：実務実習とその反省的考察―「ＳＬインターンシッ　プ」
e. 特別課題研究：修士論文は実践と理論を結びつけたテーマ・方法を重視して取り組む。

夜間大学院は「学びの場」としての魅力を発信し，個々人が学習テーマと志を起点にして「自前で」進学することが基本である。入試選抜では研究計画書，小論文，面接に基づいて合格者を決定しており，現職教員への特別措置はしていない。教育委員会からの派遣措置は廃止され，学習支援は一時措置されたがなくなった。この高いハードルを乗り越えるために，夜間大学院は授業公開，説明会，パンフレット・雑誌広報・ＨＰなどに力を入れてきた。この結果，大学院志願者は定員の1．2～1．3倍で，入学者はほぼ定員前後に収まっている。入学者の内訳をみると，校種・教科，年齢・経験年数，職位・キャリアは極めて多様であるが，厳しい修学条件の中で学ぼうとする志は熱く，学習能力は高い。夜間大学院はこの多様な人材を「つなぐ」「まぜる」「協同する」方向で学習集団として組織化し，プラスの循環を創り出すことが課題となる。

スクールリーダー・コースの入学者は4，5名であるが，校長・教頭，ミドルリーダーなど第一線の人たちである。その多くは大学と教育委員会合同の「スクールリーダー・フォーラム」や「スクールリーダー・セミナー」に参加し，さらに「プロフェッショナル」をめざして本格的に学ぶ決意を固めて入学してくる。彼らが「教師の学習コミュニティ」で学び合い高め合うことによって指導力と人間力を高め，全国発信できるよう磨いていきたいと考えている。参観者からは「先生方がオープンで率直にディスカッションされていますね」との声をいただくことが多い。夜間大学院が「デモクラティックな学習空間」として発展し，スクールリーダーが視野を広げ問題を掘り下げる「学びの場」となるべく挑戦を重ねていきたい。

最後に，この「教職大学院 News Letter」が「つながりの場」として発展し，持続されることを読者として願っています。

（参考文献）
「教師のための学習コミュニティ」PSE，2007.「教師の学習コミュニティ」PSE，2008.「スクールリーダー・プロジェクトの展開」SLP，2009.「教師の学習コミュニティを創る」SLC，2010.「スクールリーダー・フォーラムの展開」SLF，2010.「教師の学習コミュニティの展開」 SLC，2011.（大阪教育大学リポジトリに順次掲載）

フィンランド視察を終えて

3月1日から9日までフィンランドに訪問し，小・中・高等学校や大学での取り組みを視察してきました。今号で3回目を迎えた訪問記の連載，今号では「美術教室」からみえてくるフィンランドの取り組みを紹介します。

フィンランドの美術教室から

濱口　由美

はじめに

美術教育からフィンランドの学校教育にスポットを当てるとき，手工教育を普通教育の中に取り入れた世界最初の国として，本格的な木工機械や工具が完備された工作室で実施されているクラフト教育に，どうしてもその光を集中させてしまいます。しかし，今回の学校訪問視察の幕開けとなった舞台は，クラフト教育のための工作室ではなく，ノーマルリセ（日本の中・高等学校にあたる）の美術室でした。

工作室と美術室が別々に設置されているのは，日本では図工科あるいは美術科として統合されているクラ

フト(手工)と美術(視覚芸術)が，フィンランドではそれぞれに独立した教科として存在しているからです。

国家カリキュラム教育課程表を基に，クラフト科と美術科の授業時数を合わせてみると，基礎学校のカリキュラムでは日本の図工・美術の2倍以上の時間が宛がわれていることになります。もちろん，日本では技術・家庭科の領域にあたるテキスタイルや木工などの学習内容が，フィンランドではクラフト(手工)科の授業として行われているため，単純に比較するには無理があるでしょう。それでも，カリキュラム全体での総授業時数が日本よりも少ないことなどを考慮すると，造形活動やものづくりに多くの時間を有していることは，フィンランドの学校教育の特徴の一つであると言えるでしょう。

幸運にも，ここの美術室では，中学生の授業(視覚芸術)を参観することができました。そのおかげで，その後の学校訪問でも，フィンランドと日本の美術教育との差異を意識しながら，子どもたちの造形活動の足跡(それぞれの学校に展示されていた作品)を興味深く見ていくことができました。今回のレポートも，ノーマルリセの美術室を入口にして，子どもたちの作品を振り返りながら，フィンランドの美術教育を再び巡ってみようと思います。

「先生，描き方がわかりません」

私たちが訪れたノーマルリセの美術室では，20人ほどの中学生が学習をしていました。この授業の間，真っ赤なマニュキアした女の子の左手は，ほとんど上がりっぱなしでした(右写真)。それは，「描き方がわかりません」ということを先生に届ける女の子からのメッセージだったのです。

そのことを理解している教師も，何度かこの女の子のところにやってきて個別指導をするのですが，女の子はまたすぐに行き詰ってしまいます。女の子をこれほど悩ませたのは，透視図法という伝統的な描画技法の法則でした。

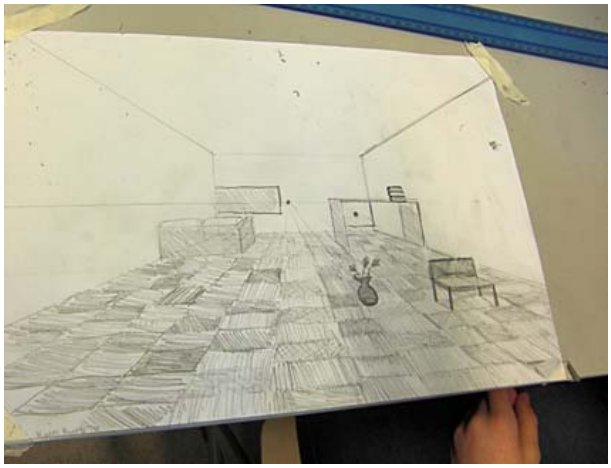
本時の授業では，「透視図法を活用して，室内などの身近な光景を描く」といったような課題が子どもたちに与えられていました。空間の奥行きを実現させてくる透視図法は，この時期の子どもたちにとって，新しい見方を引き出してくれる魅力的な技法の一つです。透視図法を初めて知ったとき，日本の子どもたちも魔法の描き方を手に入れたように感動します。しかし，見慣れた風景や部屋であっても，その全てを透視図法のルールに従って描こうとすると，それがいかに難題であるかを思い知らされます。

彼女は，今まさにその渦中にいる状態でした。円柱型の建物を透視図法のルールに宛がって描こうとするのですが，消失点につながる補助線を矩形と同じように引いていくことができません。それで，教師に繰り返しのサポートを求めるのですが，彼女と同じ状況に陥っている子どもが他にもたくさんいたため，その要望に何度も答えてもらうことはできなかったのです。

別の理由で，作業がストップしている子どもたちも何人かいました。透視図法のルールを教わったものの，それを活用して何を描けばいいのかを見つけることができない子どもたちです。自分なりの作品テーマ，つまり主題をもつことができないため，たった1本の補助線さえ画面に増やしていくことができずにいました。前に進む道しるべを見失った子どもたちは，近くの友達とおしゃべりをすることでその授業における自分の居場所を堅持しているように見えました。

ＰＩＳＡの学力調査結果から，高い義務教育成果が謳われているフィンランドの授業風景をこんな風にレポートしてしまうと，「学力調査の蚊帳の外にある美術教育」といった誤った印象を持たせてしまうかもしれませんが，「教師のやらせたいこと」と「子どもたちのやりたいこと・子どもたちができること」に「ずれ」を感じさせる授業風景は，日本の図工・美術の授業でもめずらしいことではありません。図工や美術の授業は，個々の子どもたちの活動プロセスが「作品づくり」というパフォーマンスで可視化されていくため，参観者に授業成果の明暗を安易に印象づけてしまうこの教科のシビアな一面がここでも露呈されたといった方が，いいかもしれません。

ただ，この授業の中で起きた教師と子どもの「ずれ」を，教師の指導行動から捉えなおすと，そこにはフィンランドの美術教育の方針や目的の一端が映し出されていたのではないかという別の一面を捉えることができます。次の項では，教師の指導行動を切り口に，フィンランドの美術教育の特徴を探って行きたいと思います。



教師のかかわりから見えてくるもの

「美術を通して，子どもたちに何を学ばせていかなければならないのだろうか」というこの難題に向き合うとき，私たち美術教師は「個人の独自性」と「社会的な結合」，「創造的な役割」と「破壊的・抑圧的な役割」といった相容れない概念の狭間の中で右往左往をしてしまいます。「芸術を教育の基礎とすべきである」を命題に掲げたハーバード・リードも，著書の中で「人は，その人自身になるように教育されるべきである」，「人は，その人自身でないものになるように教育されるべきである」という二元論的な課題を呈しています。そのリードの言葉を借りると，ノーマルリセの美術教師は後者の方に強い光をあてて取り組んでいるように見えました。

個別指導を必要とする子どもが多かった本時の授業では，机間巡視をする教師の次のような行動に，そのことを感じさせる姿勢が顕著に表れていました。その美術教師は，透視図法をうまく活用することができない子どもに対しては積極的な個別指導を行うのですが，何を描くのかという自分のテーマが決定していない子どもに対しては，ほとんどアドバイスすることもなく机の横を通り過ぎていました。

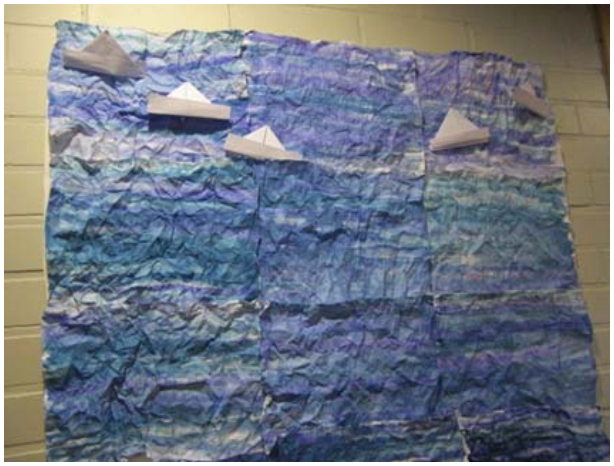
それは，授業の中で教師が指導すべきことは，個々のインフォーマルな自己表現への支援といったことより，美術の基礎となる知識や技術の習得やその洗練といったものにあることを表明しているようにも感じました。同時に，教師が教えるべきこと（本時の場合は，透視図法の描き方）と子どもたちが自分自身で考えるべきこと（本時の場合は「透視図法で何を描くか」という個々のテーマ）をはっきりと区別することで，子どもたちに活動への責任と自律を促しているようにも見えました。

さらに，見方を変えてみると，そこには足並みを揃えさせる学習プロセスに縛ろうとしない教師のおおらかさや度量があったとも考えられます。授業後，作業が進まない子どもへの対応について，参観者（ヘルシンキ大学研究員）から質問されたとき，この美術教師は「今日の授業は，これでよかったんだ」と自信たっぷりに説明していました。創造的なアイデアを生み出すために必要とする時間には個人差があり，「待つ」ことで子どもの内面に起こる学びを引き出そうとしていたのかもしれません。

教育現場に大きな裁量権が与えられているフィンランドでは，子どもに教える内容や考え方も現場の教師が自由に決められるようになっています。ですから，美術教育に対する取り組みもそれぞれの教師によって異なっていることでしょう。しかし，ノーマルリセの美術教師のこういった姿勢は，やはりフィンランドの美術教育の特徴の一端を表しているのではという視点を持ちながら，子どもたちの学びの足跡（作品）に思考の場を移していきたいと思います。

グラデーション作品から見えてくるもの

まずは，コウル小学校で見つけた子どもたちの作品を一緒に鑑賞しながら，そのことを確認していきたいと思います。



これ（上写真）は，コウル小学校の廊下に掲示されていた共同作品（おそらく2年生）です。白い折り紙のヨットと波の表情を引き出すクシャクシャの皺などから，青色の部分が大きな海であることを私たちに想像させてくれます。しかし，ここでは大きな海となる前の一人一人の小作品に分割して，1枚ずつをよく見てほしいと思います。すると，その1枚1枚がどれも，薄い青から濃い青へと鷹揚に変化していく幾重もの層で塗られていることに気づくでしょう。つまり，これは最初から海を表わそうとして描いた作品ではなく，グラデーションの技法を学ぶために描いた作品であったと考えられます。

それらを集め，このようにひと手間かけて展示をすることで，グラデーション技法が実際にどのように活かされるかを子どもたちに実感させることのできる楽しい場を創造しているのでしょう。

1つの物語をみんなで手分けして場面ごとに描いたように見えるこちらの作品（右写真）は，アニメーションの原画として作成されたものなのでしょう。登場人物たちは，自由に動くことができるように，背景から独立しています。その背景に目を配ると，物語の場面からイメージされた様々なグラデーションが効果的に描かれています。最上段の絵のグラデーションは，朝もやの風景を表わしているのでしょうか。ヒューと風の音がうなるような夜中の場面なども見えてきます。グラデーションの幅や動き・色などを自分なりに工夫しながら，物語の背景となる空を表現していったことが1枚1枚の絵から伝わってきます。

ＰＣをつかったアニメーションづくりは，日本でも図画工作の活動として取り入れられています。しかし，フィンランドと日本とのアニメーションづくりには，その製作過程に根本的な違いあることに気づきます。日本では，学校用教材として開発されたプレゼンテーションソフトを用いての活動が主流であり，そのほとんどの工程をＰＣ上で行っています。しかし，コウル小学校のアニメーションづくりは，手書きの原画（次ページ写真）とそのコマ送りをベースとしたアナログ作業が基盤になっています。子どもたちが獲得しているグラデーションなどの知識や技術を基に，繊細な

背景の表情を自らの手を通して原画を製作しているのです。それぞれの感性と手仕事がＰＣの中に飛び込み一つのアニメーションとして姿を表したとき，子どもたちは喜びと感動をみんなで共有したことでしょう。

コウル小学校は基礎教育カリキュラムを充実させるため設置された教員研修センターも併設しており，こういった教材を先駆的に開発し他校に紹介しているそうです。現代的なテーマやＩＣＴの活用を積極的に進めながらも，自らの身体感覚を通していくアナログ的活動を大切に固持しているこのような骨太の教育方針にフィンランドの底力を改めて感じさせられます。

下に並べた2枚の写真は，ヴィッキー教員養成附属中等学校の生徒作品です。どちらの作品も，グラデーションの渦から不気味な叫び声が聴こえてきそうな力強さを感じる作品です。

この作品では，補色が組み合わされた一段と高度なグラデーションの技法が使われています。さらによく見ると，2枚ともグラデーションの渦が画面の顔の残像のように呼応しながら描かれています。

これらの作品を見ていると，限定された技法の表現活動であっても，グラデーションの効果を深く追求していくの表現の場と，それに対する批判的・評価的な鑑賞の場が交互に生まれていたのではないかと想像させられます。

グラデーションをキーワードにして，子どもたちの作品を追っていくと，たった一つの表現技法も，子どもの発達段階や目的に合わせて，発展的・螺旋的に学習指導されているのが分かります。美術の教科書も色彩の基本原理が段階的に学習できるように編集されていることなどを重ね合わすと，こういった造形活動の基礎基本を習得していくための指導とそれからを自分なりに活用していく表現活動の場が，それぞれの教師固有の指導を超えて体系化されているように見て取れます。

おわりに

今回のフィンランド訪問では，「はじめに型を習い覚えること」そのものを目的とした「その人でないように教育されるべき」の傾向が強い美術教育の印象をもって帰国しました。

しかし，日本に戻ってきてから，美術室での活動と子どもたちの作品をこのようにたどってみると，そこにはやはり「児童生徒のために形態の感覚や美的感情発展を目的とし，将来，生活のあらゆる有用となる，ひろく実用的な器用さを身に付けさせるような手工業を学校に取り入れなければならない」と，手工科を導入したフィンランドの教育の父「ウノ・シグネス」の思想が教科の枠や時を超え，根付いていることに頷かされます。

時々の技術・技能の習得よりも，一人一人の長い人生における自立的な活動を支えていく基礎・基本の力の育成と心身の思索を重んじる活動，つまり自分らしい人生を歩むための豊かな土壌づくりを目指しているのではないか・・・私のフィンランドの美術教育に対する印象も，今はそんなふうに変わっています。

平成２４年度福井大学大学院　**教育**学研究科教職開発専攻（教職大学院）
学生募集　**スケジュール**

事前説明会	**平成23年７月２日（土）15:00～17:00**	**総合研究棟Ｉ13階会議室**
出願期間	**平成23年９月５日（月）～８日（木）**	**最終日17時**
ガイダンス	**平成23年９月10日（土）　10:00～12:00**	**教育系１号館６階 コラボレーション・ホール**
選抜期日	**平成23年９月24日（土）　9:00～**	**教育系１号館１階**
合格者発表	**平成23年10月４日（火）10:00**	
入学手続	**平成23年12月12日（月）～15日（木）**	

問い合わせ先：福井大学学務部入試課
〔 本学ホームページ　http://www.u-fukui.ac.jp/ 〕

研究大会案内

後援：福井県教育委員会・福井市教育委員会・(財)福井観光コンベンション協会

9/17-18 日本教師教育学会 第21回 研究大会

教師の専門職としての力量形成を支える学習コミュニティ (professional learning communities)と大学の役割
－大学と学校との協働研究の展望を探る －

2011年3月11日に東北地方を襲った東日本大震災は多くの方々に甚大な被害をもたらした。現在もなお，教師をはじめ，その復興のために日夜奮闘されている多くの方々がおられる。日本全国からだけではなく世界的規模での支援も行われている。学会からも心よりお悔やみとお見舞いを申し上げる。学会として，今回の震災に対して何ができるのか，復興のために日夜奮闘している教師をどのように支援できるのか。教師教育の視点から考えるべき課題である。本シンポジウムの報告者のお一人である盛岡大学学長望月善次氏は，まさしく被災された大学の学長である。本学会のテーマは以下に述べるように「学習コミュニティ」である。大震災から復興するコミュニティづくりについての議論もできればと願っている。

さて，知識基盤社会に生きる力を培う学校をどう実現するか。20世紀の学校，そこでの定型的学習の伝統を超えて，探究しコミュニケーションし協働する学習の文化をどのように創出していくか。学校改革への取り組みと試行錯誤が世界で，また日本で，並行して進められている。

そうした改革の実現において，新しい学校づくりの主体が教師であり，その専門的な力量形成こそが，学校改革の鍵となることが繰り返し確認されている。しかし，この鍵となる教師の実践的な力量形成という課題に関わって，従来の教師教育のシステム，伝統的な教員養成と現職研修では，それに応えることが困難であることもまた明らかになってきている。伝統的な伝達型の学習モデルに囚われた養成や研修は，旧い学習の様態を再生産・再強化するに止まり，新しい学習を実現する力にはつながらない。既存の枠組みを温存したままの表面的な改変にすぎない「教師教育改革」はすでに四半世紀以上にわたって空転を重ね続けている。改革をめぐる取り組みの多くは，そのもっとも新しい企図である教職大学院をも含めて，カリキュラムにおいて，また組織において，こうした問題を克服できていない。

しかしそうした現実，そして試行錯誤の中にあって，教師の実践力形成のための新しい学習プロセスを実現していこうとする模索，実践と研究が，少数とはいえ，つみ重ねられてきている。こうした希少ともいえる取り組みの蓄積と成果を踏まえて，現在，学校を教師が専門職として実践に即して学び合うコミュニティへと転換し，持続的協働的な実践力形成を目指そうとする取り組みに関心が寄せられてきている。それは，これまでの伝達型の短期研修やワークショップ中心のパターンを根本的に組み替え，学校を拠点に教師の長期にわたる協働的な実践力形成の可能性をひらくアプローチとして期待されている(「専門職学習コミュニティ Professional Learning Communities」)。学び合うプロセスの持続が直接に学校における協働の実践の展開と新しい学習文化の形成につながっていくことがこのアプローチの大きな特長である。日本における校内における授業研究は，現在，Lesson Study として，世界にも広がり，学校における専門職学習コミュニティの取り組みの核心として位置づけられるに至っている(秋田喜代美，キャサリン・ルイス編『授業の研究 教師の学習：レッスンスタディへのいざない』明石書房, 2008)。

今回のシンポジウムにおいては，教師の専門性形成のためのコミュニティを支える大学の役割について考えたい。従来教師教育は大学における「養成」，教育委員会による「採用」，そして実践の場に関わる「研修」という3つの場を意味してきた。しかし，教職大学院の設置，教員養成6年制構想，採用システムの公開性，教員免許更新制の義務化など，新たな政策が国から提起されている現実は，従来の教師教育の3つの場が根本から問われていることの現れといえる。諸外国の教師教育をみると，大学院も視野に入れた養成システムが一般化しつつあることを考えると，日本の教師教育の展望，特に大学の役割を問い直すことが求められている。サブテーマの「大学と学校との協働研究の展望を探る」は，教師の専門職としての力量形成を支える学習コミュニティの創造のために大学が学校をベースに理論と実践の統合・架橋の課題と正面から向き合うこと，そして大学の研究者と実践者がフィールドを共有し現実の学校の抱える課題を協働して解決する学習コミュニティを創造することにあるのではないかと考える。

期　日　2011年9月17日（土）～18日（日）
会　場　福井大学教育地域科学部（〒910-8507 福井県福井市文京3丁目9－1）
日　程

9月17日（土）		9月18日（日）	
8:30 ～	受付開始	8:30 ～	受付開始
9:00 ～12:00	自由研究発表	9:00 ～12:00	自由研究発表
12:00～12:50	昼食	12:00～13:00	昼食
12:50～13:50	定期総会	13:00～16:00	課題研究
14:00～15:00	講演	16:15～18:00	ラウンドテーブル（事前申込みによる自由な研究交流集会）
15:15～18:00	公開シンポジウム		
18:20～20:30	情報交換会		

(1)　講演　ペンティ・ハッカライネン（Pentti Hakkarainen）氏（フィンランド・オウル大学カヤーニ校教授）
通訳　北田佳子氏（富山大学）
ナラティブ・ラーニング及びフィンランドの現状と課題について。大学と学校との協働研究及び2009年10月福井市至民中・国際シンポでの感想など。

(2)　公開シンポジウム　　コーディネーター：松木健一氏（福井大学）
高間祐治氏（福井大学教職大学院拠点校：福井市至民中学校研究主任）
学校現場の立場から福井大学と拠点校の協働，及びインターンシップの院生への支援等について。
大脇康弘氏（大阪教育大学大学院教授＜夜間大学院＞）
夜間大学院における大学と学校との連携・協働について。
望月善次氏（盛岡大学学長）
大震災を経験した大学から。滝沢村との協働（ラーニング・サポータープロジェクト・不登校支援＝村の教育委員会主導で地域の小学校12校との連携）について。

参加費　研究大会参加費・情報交換会費は以下の通りです。会員は，参加前に今年度までの会費を完納してください。学生･院生の参加費は専任勤務機関のない学生･院生の場合に限ります。

参加費		研究大会	情報交換会
会　員	一般	2,000円	4,000円
	学生･院生	1,000円	2,000円
非会員	一般	2,500円	4,500円
	学生･院生	1,500円	2,500円

問い合わせ先
日本教師教育学会　第21回研究大会実行委員会
〒910-8507　福井県福井市文京3丁目9－1
福井大学大学院教育学研究科
（教職大学院）　森透研究室
Tel & Fax：0776-27-8725　e-mail：info@fukui-jsste.jp
大会HP：http://www.fukui-jsste.jp

新刊本の紹介

『ゆっくりじっくりスローライフ教育』
先生がつながりあって、小学部から高等部までの
１２年を見すえた教育

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校　編著
〒910-0065　福井市八ツ島1-3　TEL 0776-22-6781

定価　2, 310円
割引　2, 000円（学校への直接注文の場合、送料別途）

実践し省察するコミュニティ

Fukui Round Tables Summer Sessions 2011
For Reflective Practice, Organizational Learning, and Reflective Institutions

2011.6.25-26
福井大学共用講義棟

主催：福井大学大学院教育学研究科
教職開発専攻／教職大学院

2011年6月25日（土），26日（日）の2日間に渡り，福井大学ラウンドテーブル サマーセッションが開催されます。本ラウンドテーブル サマーセッションでは，教育現場における実践，学校の協働研究の展開，教員養成と研修の在り方，コミュニティの創造，といった多様な活動に従事している実践者，研究者が集い，それぞれの取組を語り合い，聴き合い，共有し，そして学び合っていきます。この2日間の学び合いが，参加者の皆様にとって実りある，豊かな経験になることを期待しております。ここでは，25日（土）「専門職として学び合うコミュニティ」で開かれるフォーラムにおける3つのZoneのねらいと報告校，シンポジウムのテーマとシンポジスト，26日（日）「実践研究福井ラウンドテーブル2011」の内容を掲載いたします。

6/25 Sat. 13:00-17:00

専門職として学び合うコミュニティ

Zone A　学校：新しい時代の学びを拓く／学校拠点の実践研究

学校教育において，教師たちはいかにしてそれぞれの自律性に基づきながら協働研究を展開し，学校づくり・授業づくりを進めていくのだろうか。また，学校づくり・授業づくりを中核とした教師たちの協働研究は，学び合うコミュニティとしての学校をいかに構築，活性化し，互いの専門的発達をどのように支えているのだろうか。さらに，長期に渡る持続可能な学校文化を創造するには，いかにして地域と係わりながら，実践と研究を積み重ね編み直して行けばよいのだろうか。Zone Aでは以上の論題を探究するために，長期に渡って協働研究を展開してきた学校，既存の学校組織を転換し学び合うコミュニティの構築に挑戦している学校の取り組みを傾聴し学んでいく。

学校における協働研究の展開を報告いただくのは小学校2校，中学校4校，高等学校2校で，以下4つのフォーラムを設けて各学校の取組を傾聴し，議論し，共有していく。

1　東京学芸大学附属世田谷小学校 (東京)
2　東京大学教育学部附属中等教育学校 (東京)
3　同志社中学校 (京都)
4　門真なみはや高等学校 (大坂)

福井大学教育地域科学部附属小学校 (福井)
福井市至民中学校 (福井)
坂井市丸岡南中学校 (福井)
藤島高等学校 (福井)

Zone B　教師：教師の力量形成を支える／教師教育改革の実践

教師教育改革の渦中にある現在，教師の専門職性をどのように捉えるのか，養成段階で培うべき能力とは何か，教師の力量形成のために研修はどうあるべきかなど，多角的な視点から教師の生涯に渡るライフサイクルにおける学びについて考えていく。特に，教職大学院における学びとその在り方については，他大学の取組も参考にしながら，議論を通して今後の可能性を探究していく。また，Zone Bでは教師個人の職能形成とともに学校づくりの過程にも焦点を当て，学校づくりにおける教師の協働の在り方についても様々な立場からの意見を交わすことで考察していく。

Zone C　コミュニティ：職場と地域の学び合うコミュニティ

専門職としての力量を培う学びとは，どのように実現していくことができるものであるのか。「職場と地域」というフィールドにおける取り組みをふまえ，実践・省察・交流のサイクルを持続的に発展させていくコミュニティとの関わりでこの問いを深めていく。今回は，「学校運営と組織評価」，「特別支援・保育における＜個＞への支援とコミュニティ」，「社会教育・生涯学習に関わるコーディネーターの役割とその力量」といった分野テーマを設定し，各分野における実践の軌跡をじっくり聴きとり，学び合うコミュニティを培っていくための具体的展望をめぐって語り合い，議論を共有してい。

【学校運営と組織評価】	三重県立北星高等学校	福井大学
【個への支援とそれを支えるコミュニティ】	福井県立福井南養護学校	鯖江市片上幼稚園
【コーディネーターの役割とその力量】	公民館・社会教育実践	

Symposium　実践に学び合う広場 － 実践の広がりに出会う －

A	**持続可能な学校文化を創る**	**松本謙一（富山大学）**
B	**職能形成と学校形成について**	**勝野正章（東京大学）**
C	**学び合うコミュニティを培う**	**三輪建二（お茶の水女子大学）**

6/26 Sun. 8:30-14:00　実践研究福井 ラウンドテーブル2011

2日目は，分野を越えたクロスセッションにおいて，6名程の小グループで実践の歩みを語り合い，聴き合い，学び合います。福井大学教職大学院の院生だけではなく，県内外の様々な分野の方々から実践報告をしていただきます。

今回のフォーラム／ラウンドテーブルに参加しての感想等を，以下のアドレスまでお寄せください。参加いただいた皆様の御意見，御感想をお待ちしております。

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）　**dpdtfukui@yahoo.co.jp**

Schedule

6/25 sat -26 sun　福井ラウンドテーブル・サマーセッション

7/2 sat　福井大学教職大学院入試事前説明会

7/9 sat　７月合同カンファレンス

Newsletter No.33 をお届けします。今号の編集にあたって心がけたことは，「実践し省察するコミュニティ」の創造と発展の鍵が，多様なコミュニティでの探究活動とその重なり合い，そこで生まれる新たな探究活動がもたらす新たな位相に布置することを示すことでした。その位相では，多様なレベルでの協働や連携，学びとケアが存在することを，掲載記事が示唆していると思います。今号が皆様の探究活動の一助となれば幸いに思います。（木村優）

教職大学院Newsletter　No.33
2011.06.25発行
2011.06.25印刷
編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp